

主任司祭 佐藤謙一

第一朗読：シラ書（シラ 35・15b-17、20-22a）；謙虚な人の祈りは、雲を突き抜けて行く

答唱詩編：（詩編 34・2+3、16+18、19+23）；主を仰ぎ見て、光を受けよう。主が訪れる人の顔は輝く。

第二朗読：使徒パウロのテモテへの手紙（二テモテ 4・6-8、16-18）；今や、義の栄冠を受けるばかりである

アレルヤ唱：（ニコリント 5・19）；神はキリストのうちに世をご自分に和解させ、和解のことばをわたしたちにゆだねられた。

福音朗読：ルカによる福音（ルカ 18・9-14）；義とされて家に帰ったのは徴税人であって、ファリサイ派の人ではない

今日の福音はファリサイ派の人の祈りと徴税人の祈りが描かれています。ファリサイという言葉は分離するという意味の言葉に由来します。では何から分離するのでしょうか。

イエスが現れる200年くらい前にユダヤはセレウコス朝シリアに支配されました。この国はユダヤを支配してヘレニズム化政策、つまりギリシャ化の政策を進めました。ギリシャ化というのは、エルサレムの神殿からいろいろなものを略奪して、異教の神々の偶像にいにえをささげさせたり、律法を忘れさせたり、掟をすべて変えさせたりしました。ヘレニズム化を歓迎したのは上級祭司や土地を持っている人など実権を握る者たちでした。逆に警戒したのが、下級祭司や農民たちでした。上級祭司や権力を持つ者はセレウコス側についた方が人々を支配しやすかったので歓迎しました。下級祭司や農民は、唯一の神こそが自分たちを守るものであり、ギリシャ化には反対し、律法を厳しく守っていました。のちに上級祭司はサドカイ派となっていき、下級祭司はファリサイ派となっていきます。ですからファリサイ派の人々は初め、弱い者とともに手をたずさえて、自分たちの宗教を守っていこうとする人たちだったのです。ですから「分離する」というのは、ヘレニズム化とは明確に分離するという意味になります。それは自分たちの律法をしっかりと守り、セレウコス朝と対抗しなければならないということから、結束を守るために必要だったと言えます。その後マカバイ戦争が起り、神殿を取り戻したということが聖書のマカバイ記に書かれています。イエスの時代にもファリサイ派は続いている、律法を厳格に守るということが続いていました。

イエスの時代にはユダヤはセレウコス朝からローマ帝国に代わって支配されていましたが、宗教に関してはある程度ユダヤ人の自由に任されていました。ローマ帝国は、税金徴収という仕事のためにユダヤ人の中から徴税人を任命していました。その仕事でローマから給料をもらっていたと思いますが、それに加えてユダヤ人に手数料を上乗せして徴収することもできたようです。ユダヤ人でありながらローマ帝国の手伝いをし、さらに上乗せしてユダヤ人から税金以上の金を取る裏切り者と思われていたのです。

この二人、ファリサイ派の人と徴税人の祈りが、神に受け入れられるものかどうかをイエスはたとえで示しているわけです。ファリサイ派の人の祈りは、「わたしはこのような者ではありません」、「わたしはこのような者です」という2つの祈りが入っています。わたしはこのような者ではありませんというのは、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者、また、この徴税人のような者でもないことに感謝します、ということです。わたしはこのような者ですというのは、週に二度断食し、全収入の十分の一をささげています、ということです。

これは祈りといえるのでしょうか。この祈りには神の恵みを求めるを感じさせるところが全くありません。すべて自分の力で達成することができたと言っているだけです。この祈りを神が聞いて「偉いねえ」とほめてもらえるとでも思っているのでしょうか。神に心を向けて祈っているのではなく、単に自分の行わなかったこと、行うことができたことを言っているだけです。自分で自分はこんなに出来て偉いのだと思っているだけで、こんな報告は神にとってどうでもいいことです。言ってみれば当然のことをしてただけです。むしろ、「わたしは当然のことをしただけです、わたしを憐れんでください」というなら神もこの人を正しいとされたかもしれません。

ファリサイ派の人が本当にしなければならないことは、迫害されていた時代の精神に戻り、律法を守らない人には自ら近づいて行って律法を教え守るよう導くべきなのです。ところがそういう人には近づかず、むしろ排除しようとしているように感じます。遠く離れて立って祈っている徴税人には、不正を働くかず正しく徴収するよう近づいて行って働きかけるべきでしょう。ここに出てくるファリサイ派の人は自分が律法を守ってさえいればそれでいいという考えです。確かに週に二度断食するとか、全収入の十分の一をささげることはいいことには違いありません。しかし隣人を愛するという心が欠けていましたし、神のあわれみを求める心に欠けていました。

徴税人はどうかというとただ自分の罪を悔やみ「神様、罪人のわたしを憐れんでください」と言うだけです。遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言ったのです。この徴税人は周りからさげすまれて孤独になったときに、ふと立ち止まって、過去を振り返って、われに返ったのかもしれません。いろいろな不正によって富を得ていたことによって、苦しんでいる人がいることに気づいたのかもしれません。これからこの徴税人は人々に取りすぎた分を返すかもしれませんし、不正をしないようになるかもしれません。神に心を向けて憐れみを求めるという祈りは、そういう行動をとることができることにつながるのです。

わたしたちもどう祈ればいいか分からなかったときには、他人と比較して優越感をもってする祈りをしていたかもしれません。少なからず、ここに登場するファリサイ派の人のような面があったかもしれません。しかし、皆さんもこの徴税人のように神に心を向けて、自分の行いを振り返って、素直に神に憐れみを求める祈りもしているでしょう。他人との比較をしているだけでは、神とのかかわりを妨げてしまうだけでなく、人との関係も絶つことになります。周りの人がすべて競争相手という世の中にあって、イエスが教える祈りは大切なものです。わたしたちも「神様、罪びとのわたしを憐れんでください」という祈りから始めていきましょう。